

Locative Adverbials and the ing-form

久 屋 孝 夫

Abstract

This paper offers a localistic view of the ing-form with special reference to the English there-be construction and to the where-question. We expect the readers to be acquainted with previous insightful arguments put forward by Ross, Anderson, Bolinger, Lyons, and so on.

The sentence: there's a woman waiting at the gate can be analyzed in the same manner as there's a woman at the gate. We consider waiting at the gate to be functionally the same as at the gate.

The response with the ing-form to the where-question (e.g. Where's my father?—Weeping and wailing over Tybalt's corse.) is as natural as one with a locative adverbial, because on the semantico-syntactic plane there seems to be little difference between the locative and the ing-form.

What seems to justify the statement above is as follows:

- (i) There also occurs a there-be construction with another type of the ing-form (i.e. a-doing) immediately after an indefinite NP, like: there is a great fleet a preparing, in which sentence a preparing seems to operate like a prepositional locative NP (in fact, a is originally a vestige of the preposition on). (ii) In the pair: he's here again and looking for trouble/he's here and wet, the latter is ungrammatical, because of the semantic inappropriateness of the conjoinability of temporary here, and permanent wet. (iii) In the set of binary opposition: Joan is singing well/Joan sings well, the former alone indicates Joan's performance (i.e.

'temporariness', as against 'permanence', of her singing).

(iv) The where-question not infrequently leads the addressee to answer not only the literal but also abstract location of the person(s)/thing(s) in question (e.g. Where will you be, if you offend him? / Where's Joe?—He's in the garden/at confession/asleep/reading.).

Let us, therefore, place the ing-form between the two extremes: literal/concrete position and figurative/abstract one, on the continuum or the scale of spatial location.

O. Preliminaries

読書中に次のような例にでくわして、ふと疑問を持った。

(1) a. *Where* is my father, and my mother, nurse?—*Weeping and wailing* over Tybalt's corse: (Shak.)

b. *Where's* master?—Now *preparing* for projection, sir. (Jonson)

このような疑問詞 *where* を含む疑問文に対する答として出現する *ing* 形は、*where*-question に対して端的に解答してはいないのだろうか。言い換えれば、場所の副詞を用いるべきところを端折り、本来ならその次に説明的に付加されるべき応答を先どりしたもので、結局は *where* に関して間接的で多少なりとも焦点の合っていない不十分な表現なのであろうか。これが本論文の序説となる第一点である。

また私達は次のような例などには頻繁に出会う。

- | | | | |
|--------|------------------|--|----------------------|
| (2) a. | There is a woman | | at the gate. |
| b. | | | waiting. |
| c. | | | waiting at the gate. |
| d. | | | ∅. |

ここで問題にしたいのは、native speakerは(2) aを生成するのと同じ過程を辿って(2) b-dをも生成しているのではないだろうか、言い換えれば、これら一連の *there-be* 構文に、全く同一の生成手順を適用しているのではないかということである。

以上2つの素朴な疑問点を *ing* 形と場所副詞の意味論上の類似性という観点から考察してゆくことにする。できるなら *ing* 形のみならず他の品詞と場所の副詞の共通性も考えてみたい。

1. *There*₁, *There*₂

まず *there-be* 構文から考察していくことにするが、手始めに従来言われてきた如く *there* の 2つの型 (これを *there*₁, *there*₂ としておく)¹ を一応認めておくことにする。(3)を参照されたい。

(3) a. *There*₁'s a mistake *there*₂ (unstressed [ðə], + indefinite NP)

b. *There*₂'s the rub. (stressed [ðeə], + definite NP)

(4) a. *There*'s a mistake *there*.

theme	rheme	
given	new	given

b. *There*'s the rub.

theme	rheme
new	given

すなわち *there* は (i)音韻論上 stress の有無で,² (ii) theme-information の観点から marked theme になりうるかどうか,³ (iii)共起する、主語となる NP が意味論上 definite であるかどうか,⁴ によって区別される。私達がここで議論しようとするのは stress を受けず、marked theme になれず、indefinite NP と共起するところの、従来 *expletive*, *introductory*, *dummy* などの名を冠せられてきた *there*₁ (以下の記述において、紛わしい場合を除いて単に *there* と呼ぶ) に関してである。⁵

以上のことを踏まえた上で、上述した(2)cの如き例に関してこれまでにとられてきた分析法の代表的ないくつかを振り返ることにする。

2. Some previous analyses of: *there is NP ing*.

*There*₁ is a woman waiting for you at the gate.をここでは *there be NP_{indef} ing* の例として検討の対象としよう。

2.1 まず Jespersen であるが、彼があげている類例の吟味をしてみよう (Jespersen 1937:39 /43/70)。

(5) a. *There*₁ are many churches *there*₂ (3/s V S 3)

b. *There*₁ is an answer waiting (3/s V S P)

c. The war is at an end (S V P)

(5)a-bにおいて *there*₁ は、僅かながら主語としての役割も受持つけれど、⁶ *tertiary* の役割の比重の方が大きい。(5)aの *there*₂ が *tertiary* になるのに対して、(5)cの前置詞 *at an end* は(5)bの *waiting* と同様 *predicative* という分析を受けている。つまり *NP_{indef}* に続くものが *locative adverb* である場合と、*ing* 形である場合で解釈が異なる訳である。ここから推察

するならば、問題の分析すべき文の *waiting for you at the gate* の部分は P 3 というように記号化できるように思われる。この様に考えると *tertiary* となる *at the gate* のみが、いわば同格的に *there* と拘わりを持つわけで、直観的に意味上ひとまとまりをなしていると感じられる *waiting……at the gate* が二つの部分に分離されることになり、結局「あなたを待っている御婦人は門のところです。」という、やや異なった意味解釈を受けかねない。Jespersen の *tertiary* と *predicative* の区別も (5) c の *at an end* の分析法を考えると、意味論的に十分でないように思われる。

2.2 *waiting* 以下の意味論上のまとまりを区切ることなく分析しようとすれば、この句全体に *a woman* を修飾させればよいことになる。しかしそうすると ^{**}*There is a little boy knowing the answer* の非文法性は説明不可能になる。

2.3 中島文雄 1961:193, 毛利可信 1972:264 などは *a woman* と *waiting* 以下が *nexus* をなしていると考えている。すなわち「一人の婦人の君を門のところに待つあり。」と解釈するわけである。ところが、これでは *there is/are* の対立を説明することができない(同様の数による動詞の形態の変化はイタリア語などにもある)。ただし、フランス語、スペイン語の存在文 *il y a, hay*, およびドイツ語の存在文 *es gibt*⁷ などにおいては、NP の数による動詞の変化がないという現象を一見説明するように思われる。ところがそれらの言語においては、英語の NP と違って、その NP が主語というより、むしろ目的語としての機能を形態論上は果たすので、この場合の有力な証拠にはならない。

2.4 Curme 1931:9f. は *there* を *anticipatory subject* と見做し、*a woman* 以下をいわゆる主語とする。この考えによって *there/it is no use ~ing* などにみられる *there/it* の *interchangeability* の説明が容易にできる利点はあるが、しかし大部分は *it, there* のいずれかでなければならないので、この場合の説明には不十分である。Trace theory を提唱する Chomsky 1975:107ff および *structure preserving transformation* を主張する Emonds 1976:104ff も同一線上にあると思われる。

2.5 吉川美夫 1970:383 によれば、これは *there is a woman* と *a woman is waiting for you at the gate* の *blending* であるから、このままの形で論理的な分析をすることは無理だ、としているが果たして不可能であろうか。

2.6 Huddleston 1971:326 (部分的には石川清文 1972:59 も) は *there is* における *is* は *progressive aspect* を表わすもので、*progressive* のひとつの *stylistic device* であるという。それでは *there* が何故に起こるのかということの説明は十分ではないように思われる。

2.7 上にいくつかの分析例を列挙したが、ここに暫定的なひとつの提案をしてみよう。

Huddleston は *be* が *aspect* を表わすものと考察したが、私はいわゆる辞書レベルにおける

beの分析, 例えば copula *be*, existential *be*, auxiliary *be*などの区別立ては, 深い意味構造においては一切不要ではないかと思う。⁸

すなわち *waiting* 以下は *there* と全く同様に tertiary の役割を果たすもので, *a woman* という new information を文頭に出すことの不自然さを回避するための *there* 挿入⁹になったのだと考える。つまり, *There's a book on the desk* の *on the desk* の部分が *there* 挿入によって後置されたのと同様に *waiting* 以下も後置されたと思倣すわけである。この分析をいくらかでも助けられると思われる資料を以下いくつか引用して検討したい。

3. Existential and locative sentences

前節で, 表面構造を基準にしてのbeの区分は不要であると説いたが, これについて二つの対立する興味ある意見を並べておこう。

- (6) a. Quirk: the 'bare existential' sentence... simply postulates the existence of some entity or entities (eg. Undoubtedly, there is a God/There have always been wars)
- b. Lyons: The assertion that something exists, or existed, requires 'complementation' with a locative (or temporal) expression before it can be interpreted. (cf. *il y/ci sono/hay/dasein*)

2つの議論の相違は, 存在文には (surface structure に表われるかどうかは別にして), locative (adverbial) が必然的に伴うのかどうかという点にある。Lyons 1967: 390, 1968: 390 は存在文は implicitly locative であると言い, 諸外国語の同種表現を有力な証左として挙げる。それに対して Quirk et al. 1972: 959 は locative を全く伴わない bare existential sentence があるとする。ここでは Lyons の説を採用する。¹⁰ be は一般的に広義の locative を伴い得ると考える方が, 理論的にも説明力が大きく, 人間の言語の直観的把握にも合致すると思われるからである。

4. There₁-insertion

すでに考察してきた様に *there*₁ と *there*₂ の区分は明瞭になったが, 今ひとつ刮目しておかねばならないことは *there*₁ が deep structure には存在しないという事実である。すなわち純たる locative adverb の *there*₂ は deep structure に存在するが *there*₁ は *there*-insertion と呼ばれる変形によって導入されるのである。(7)を参照されたい。

- (7) Huddleston (1976: 117): ...introducing dummy *there* by transformation rather than PS rule (cf. *There are now being manufactured some thirty different brands of washing powder by just two major companies: no*

active counterpart with *there*₁)

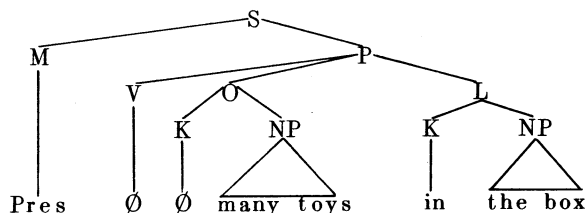
括弧内の例文は passivization のあとで *there*-insertion が適用されたものである。これは対応する active sentence に *there*₁ の含まれたものが非文法的であり、passivization 以前に *there*₁ の入る余地がなかったことから理解される。これが *there*₁ の変形による導入をすべきだという論拠になろう。

この *there*-insertion については二つの方法が提案されてきている。(8)は Fillmore 1968: 82 ff が示したもので、b → e の順序で変形されていく。(9)は Kuno 1971: 377 によるもので a → c の順に派生される。

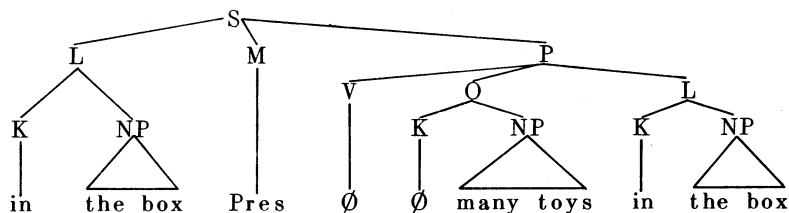
(8) Fillmore's proposal for sentence with *there*₁

a. There are many toys in the box.

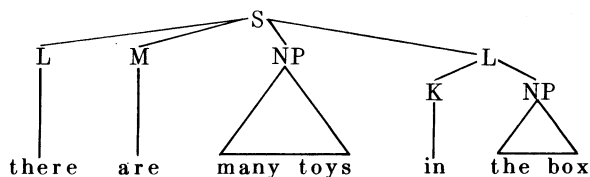
b.



c.



d.



e. Under certain conditions, a first copy L may be replaced by an expletive *there*.

(9) Kuno (cf. Anderson)

a. "Deep" underlying structure: S L (a book is on the table)

b. Early structure: L S (on the table is a book)

c. Locative-postposing: (there is a book on the table)

Fillmoreによれば L(ocative): in the box は copying によって、さらにもうひとつの同

一の L: *in the box* を派生し、この派生された L が *there* に置換されるという手順になる。

一方 Kuno の方法では *deep structure* にかなり近いところに *early structure* なる構造を仮定する。そこでは *subject-locative* の序列が逆に *locative-subject* となり、やがてこの L が後置されて生じた空白を *there* が埋めるという形をとる。Kuno が勝れている点は、実際に *early structure* である LS の語順 (*given information* である *locative* が文頭に来る型) がしばしば表層に現われる¹¹ という点と、*copying* による二つの同一の L を不必要に派生することの無駄がないという点にあると思われる。筆者は *there-insertion* に関しては Kuno 説がより適当であると考ええる。

5. Location, literal and figurative

次に〈場所〉の概念を *literal location/figurative location* の対比から考えてみたい。まず次の諸例を参照されたい。

- (10) a. *There's a man at the door.*
 b. *There was a sudden drop in the temperature.*
 c. *There can be no doubt about it.*
 d. *There are fashions in pronunciation as in dress.*
 e. *There is a rumour abroad.*
 f. *There is no good in (your) saying anything.*

(10 a-f のイタリック体のうち、純粹に *literal* もしくは *concrete* な〈場所〉を示す語句は (10 a) のみであるが、(10 b-f) を (10 a) と別箇に扱うのは直観的にみても不自然ではないかと思われる。¹²

人間の言語の法則は有限である。この事が *there-be* 構文に広い意味での〈場所〉を表わす様々な句の出現を可能にしているのではないだろうか。¹³ 同様の例を *where* についても見ることができる。

- (11) a. *Where is Dorothy?*
 b. *Where on earth are your eyes, child?*
 c. *Without money, where are you?*
 d. *Where will you be, if you offend him?*
 e. *Where is the use of being obstinate?*

〈場所〉の副詞が、問題となっているものの具体的な所在を問うだけでなく、もっと抽象的な〈場所〉、言い換えれば、人、物の状態をも問うことができることは明らかである。勿論この現象は英語にのみあてはまるものではない。¹⁴ 仮に〈場所〉を表わす様々な句を〔具体〕と〔抽象〕を両端とする同一線上の連続体と考えた時に、私達は *ing* 形をどのようにとらえ、位置づけることが可能だろうか。

6. Another type of the *there* construction

前節に関連して次の例を見ていただきたい。

- (12) a. there are two vat(=fat) pigs *A zindging* (=singeing) by the vire
(=fire). (Jonson).
b. There is some ill *a-brewing* towards my rest. (Shak.)
c. There is a great Fleet *a preparing*. (Howell)

いずれも *there-be* 構文に *ing* 形が伴う型ではあるが、その *ing* 形に *a-* という particle が付加されているのに注目したい。これは古く前置詞だったものが縮約された形でかすかに名残りをとどめているもので、まさに *ing* 形を広く locative とみなしてよいひとつの証拠となるのではなかろうか。¹⁵

7. *Ing*-forms in apposition to locatives; zeugma

ing 形が locative に類似したものであることはさらに次のような例で示されよう。

- (13) a. A new park is *a making there*.
b. their sister-in-law...was *there hoping* for some delay on their part. (Austen)
c. *there* was the Ladies serving-man *swearing and stamping*. (Greene)
d. *here's* his wife *comin'* downstairs to get breakfast. (Wilder)
e. *here's* Mistress Page *at the door, sweating and blowing and looking* wildly (Shak.)
f. *where* have you been? — *At the foot* of the rock for running water, and *gathering* roots for your dinner (Peele)

この型は、特に Mossé 1938:49 ff が進行形と深く拘わる構文として重視しているもののひとつである。

(13 a) の *there* が *making* に支配されている例は適切とは言えぬが、それを除外すれば、接続詞 *and* が表立たない例においても、locative adverbial と *ing* 形は対等に結合しているように見える。このようなことが可能になるのは *conjoin* される二要素間に何らかの共通な意味特性があるからではないかと考えられる。

この点をさらに深く考察するために次の例を検討してみよう。

- (14) a. Bolinger: essence and accident
b. He's *sick and afflicted*. /*He's *wicked and afflicted*.
c. He's *here again and looking* for trouble. /*He's *here and wet*.

- d. He's at home in bed reading. / *He's home wise.

⑭の各組の左の例文においては、イタリック体の二つの要素が part of speech の同一性によってではなく、何らかの他の共通性によって結合していると言える。これは各文の右の例が非文法的であることによって知られる。¹⁶ この隔された意味の基準を Bolinger 1973 は essence と accident の対立であると見た。例えば⑭b において here と looking が不調和なく coordinate されるのは、両者が共に accident (一時的状態) を表わすからである。一方 here が wet と共起しないのは、前者が accident を表わすのに対して、後者は essence (永続的状态) を表わすからである。

この essence/accident の対立を考えることによって、locative と ing 形の意味論的特性の共通性がいくぶんか明らかになってくる。¹⁷

さて同じことを there-be 構文で考えてみると興味のある事実が浮かんでくる。

- ⑮ a. There was no longer any perturbation visible on her face. (Joyce)
 b. There is an Indian lady very sick. (Hemingway)
 c. There were several students absent. (Ross)
 d. *There were several students tall /members. (Ross)

これらは、いずれも indefinite NP のあとに adjective (または noun) が続く例であるが、

⑮d は a-c と異なり非文法的な文となっている。⑮d の *members が不可なのは統語論上の問題というよりは、*tall が不可であると同様に意味論上の制約であると見るべきであろう。

indefinite NP のあとに来るこれらの形容詞は reduced relative clause ではない。ただし⑮a におけるように、いくつかの形容詞は postpose されるのが義務的であるかのように見えるものもあるが、これも何故に特定の形容詞群 (e.g. afraid, asleep, awake) がそのような位置を取るのか、また何故 attributive な用法を持たぬのかということまで掘りすすんでいかなければ真相を見誤る恐れがある。わかりやすい例を Quirk et al. 1972:249 から引用しよう。

- ⑯ a. Quirk: temporary vs permanent
 b. *An afraid man (A man is afraid) / A timid man (A man is timid)
 c. the stars visible (=stars that are visible at a time specified or implied) / the visible stars (=stars that can (at appropriate times) be seen)
 d. Joan is singing well. (performance) / Joan sings well. (competence)

⑯c の第1の例文は、ある季節、ある時期に決まって眺められる星の集合であるのに対して、第2の例はある機会にたまたま見られた星の集合である。概して形容詞の前置によって内在的性質が表わされ、後置によって一時的な性質が表わされるのである。¹⁸

このような対立は Quirk et al. 1972:92 によれば動詞の aspect の中において、progressive

と non-progressive の対立にも散見することができるという。progressive は (10d) の左の例
 言えば、Joan の performance (たまたまある時うまく歌えたこと) すなわち accident を表
 わし、non-progressive は右の例に示される如く Joan の competence (歌うのが得意だとい
 うこと) すなわち essence を述べることになる。

Anderson 1973:58 は理論的実証的考察の結果、この形容詞の2つの用法について、各々ほ
 次のような深層の構造を仮定する。

(17) a. Anderson: contingent/transient vs absolute/equative

b. [John] is [Ø ill] / [the stone] is [Ø hard]
 nom V loc nom V nom

形容詞が locative に支配される時は、contingent (または transient), nominative に支
 配される時が absolute (または equative) な用法だとする。¹⁹ この対立は単に理論上の生産物で
 はない。この対立が、具体的に個々の言語の表層に現われてくるのである。典型的な例を挙げれば、
 フィンランド語では essive (態格) を前者について使用するし、スペイン語では英語の be 動詞に対
 応するもののうち *estar* が前者と、*ser* が後者と共起するという事実がある。

8. Occurrence of the *ing*-form in response to a where-Q

ここで最初に提起したもう一つの疑問にたちかえてみる。where-question に対する *ing* 形に
 よる応答の例をさらにいくつか列挙する。

(18) a. I have spy'd Sir Epicure Mammon---Where?---Coming along, at far
 end of the lane, (Jonson)

b. Behold, Manes, where thy master is, seeking either for bones for
 his dinner or pins for his sleeves. (Lyly)

これらの例について Bolinger 1971:249, 1975:550 は native speaker の直観を披露し、
 次のように述べている。すなわち「何をしているのかを聞いているのではなく、どこにいるのかを聞
 いているんだ。」と反駁するのは的はずれであると言う。筆者は彼と全く同意見である。これらは当然
 のような例とも関連しているはずである。

(19) a. *whither* are you going?---I am going to prepare his chamber.
 (Arden)

b. *whither* are you going?---To fetch my master's nag. (Arden)

(19)における *whither*-question に対する *to*-infinitive による応答は(18)との拘わりから興味深
 い。つまり *to*-infinitive は dative infinitive にその起源を持つから、もともと方向性
 を示すために用いられたと思われる。勿論 *whither* 自体が方向を問う疑問詞であることは疑いない。
 その点でこの communication は正に申し分なく成立していると考えられる。(19)のような response

には起源的のみならず、深層に横たわる意味構造がちらりと顔を覗かせているのではないか。

それと同様に(8)においても平生は見過ごされてしまうような深い構造が表立っているとは言えぬだろうか。例外こそ本質的なものを内包している筈である。

9. Overview of recent studies on the *ing*-form

これまでに述べてきた英語の細かい局部的な言語現象の背景として概観しておくべき1975年前後までの *ing*-form 研究の流れは管見によれば以下のようなものである。

- (20) a. Bach(1967): *He is eating a sandwich* would be derived from *He Pres he Pres eat a sandwich*. (underlying complex sentence)
- b. Grady(1967): in the structure so-called 'aspect' or as an 'adjectival' modifier, the English *-ing* form is a nominalizing element...
- c. Ross(1969) : Max was chortling when I got up yesterday morning and he was still *at it* when I went to bed that night.
- d. Bolinger(1971): ...regarding the *-ing* of the progressive as an adverbial nominal; that is, as a prepositional phrase from which the preposition has been deleted. (eg. He is (at) home.)
- e. Anderson(1973): markers of aspect (locative in Basque, Finnish, Egyptian, etc.)

いわゆる *ing* 形については1960年代後半から理論的考察が深まり、1967年にBachが進行形は深層において complex sentence を成している(言い換えると、*ing* 形は名詞に酷似している)ことを、またGradyは *ing* 形が nominalizing element であることを、各々主張した。Ross 1969は progressive *-ing* を含む句が関係詞化および代名詞化可能であることから *ing* 形を動名詞と見做すと共に be を本動詞であると提唱した。

Bolinger 1971は *ing* 形の名詞的性質を様々の証拠から力説すると同時に、*ing* 形の持つ副詞的性質にも言及した。Anderson 1973は localistic theory の立場から progressive aspect の marker を locative と考え、世界の諸言語に位格、態格が英語の進行形に相当する表現に用いられることを実証した。²⁰ このように言語の普遍性の追求が深まるにつれて、*ing* 形もその本質を locative という形で私達の眼前に姿を表わしてくるようになる。

10. Conclusion

以上を要約し図式化すれば次のようになるだろう。

② a. There be NP_{indef} LOCATIVE

(examples)

b. LOCATIVE →	∅	There's an 8.30 a.m. train.
	Adverb	There's a step there.
	Particle (NP)	There's a button off (the coat).
	Prep-phrase	There's a step at the corner.
	-ing	There's a man sleeping.
	(Adjective)	There's a man asleep.
	(Past pple.)	There were two cries heard.

つまり② a の LOCATIVE は② b に挙げた様々のタイプの locative phrase によって書き換えられるのである。その locative phrase が表面化せぬ場合が ∅ で示されている。最後の 2 つの型のうち Adjective については第 7 節で多少注意を喚起した (e.g. asleep, afraid) つもりだが、Past pple についても locative の可能性は否定されないと思われる。この there-be 構文には屢々受身の意味を持つ過去分詞が共起するが、例えば heard などを within/in hearing のように見做し、同様の分析をする余地は残っているであろう。まだ暫定的ではあるが。諸外国語で用いられる同様の構文において indefinite NP のあとに置かれる句にどのような可能性があるか検討してみる価値はあると思われる。英語は最もこの構文を多目的に用いているという結果が出てくる可能性は十分あるだろう。

総括すれば、locative の役割を果たすためには存在の〈場所〉を表わす句が必要とされる。それが concrete な場合を私達は普通 (狭義の) locative と呼ぶのだが、筆者はさらにすすんで abstract な〈場所〉へと移行していくような、文字通りの〈場所〉から逸脱した、異質と一見思われるような抽象的な存在の仕方、状態をも locative と見做す立場をとるべきだと考える。

注

* 本稿は 1976 年 9 月 19 日福岡大学で開催された第 6 回西日本言語学会での口頭発表の原稿に加筆したものである。このペーパーの前身となった未発表の原稿 (英文) について示唆助言を下さった安藤貞雄教授、発表を聞いて下さった学兄諸氏に感謝する。

なお用例は英語については自分で収集したもの他、諸学者の学術書、COD⁶、UED、OED など、日本語については岩波古語辞典、日本国語大辞典 (小学館) などいちいち断わずに利用させて戴いたものもある。

1 この表記の仕方は Allan 1971 に依る。

- 2 stressed/unstressedの区別はドイツ語にもあるとKirkwood 1969:104は述べている。
(i.e. es[ɛs/əs])。
- 3 Informationがnew/givenのいずれであるかによってthemeもmarked/unmarkedのいずれかになる。いわゆる存在文でnew informationを文頭に出す言い方が避けられるのは、
A book is on the deskのような文が、どこかしら落着かないと感ずることによって理解できよう。Information, theme, rhemeなどの用語についてはHalliday 1967/1968, Chafe 1970, Muir 1972などを参照のこと。
- 4 definite/indefiniteの差は形態論上の冠詞の有無ではなく、意味論上の対立である。
cataphoricなtheなどは意味論的にはindefiniteである。この点に関して、例えばNamiki 1973参照。
- 5 あとひとつ注意すべき点は、中島邦男1967:242ff, 三上章1960:263によって力説されるようにthere₁はthere₂と異なりsurface subjectのようにふるまうということである。
- 6 小文字sはlesser subjectを表わす(Jespersen 1937:16)。類例を見よ: It is a pleasure to see you s VPS (IO)。
- 7 各国語の存在を表わす表現については、Di Pietro 1971:79f, Lyons 1967, Jespersen 1924:154ff, Curme 1922:457などを参照のこと。
- 8 英語のbe動詞に完全に対応する訳ではないが、次の日本語の「いる」「ある」「おる」を含む例は興味深いと思われる。
- 陸奥の小田なる山に黄金ありと
 - 諸人は今日の間はたのしくあるべし
 - 八重の柴垣〔ニ〕入り立たずあり
 - よそに居て恋ふれば苦し
 - 物のかくれよりしばし見るたるに
 - 何ンにもせずにいるのさ
- 日本語の「ある」「いる」は名詞、形容詞、動詞のいずれにも自由に付加できるし、各々の用例において「ある」「いる」が別個の意味を持つのではなく、直観的に同一の意義を備えているように感じられる。高橋太郎 1976:128の指摘するところによれば、「している」という表現よりも「せずにいる」という打消しの言い方に付加され「いる」に強い本動詞性が感じられるという。
- これは、本動詞と助動詞が統語論上、意味論上截然としないことを物語るものだろう。
- 9 There-insertionについては第4節で詳しく論ずる。
- 10 Lyonsと同じ立場を取るものにAndo 1976:8がある。
- 11 同じthere-be構文においても要素間の語順が変化するとbe動詞も多少意味合いを異にするという吉川美夫 1970:382の指摘は興味深い。次例を参照されたい。

- a. Lying on the floor was a dead man... (Wilde)
- b. On the floor
Lying on the floor | (there) was a dead man.
- c. ? A dead man was | on the floor.
lying on the floor.
- d. There was a dead man | on the floor.
lying on the floor.

彼によれば、場所を示す副詞句が文頭に立つ時、さらにその前に分詞が位置する場合、この分詞は「あり方」を示すと共に、文頭の位置を占めることによって存在の意味をより多く表現できる、としている。「あり方」は「存在の仕方」である。このことは、卑見によれば、文頭に分詞がそうでない分詞よりも locative としての機能を強く持っている、と言い換えられるように思われる。

12 Liefink 1973:104ff も semantico-syntactic level においてはそのような差異を認めてはいないようである。

13 言語の場所的解釈を理論の軸とするものに Ikegami 1976, Anderson 1971 などいくつかの著作をあげることができる。Ikegami のものは動詞の最深の層における構造分析を出発点にして、表層に実現される case の意味解釈を深化していく立場の Anderson などよりもずっと抽象化の方向へと傾斜している。人間の認識における spatial relation の primacy については Miller & Johnson-Laird 1976:375 など参照。

14 日本語の『彼の真意はどこにあるのか』などを比較せよ。さらに次のような英語の用例を検討されたい。

- a. Where's Joe ? ——— He's reading.
- b. ——— He's asleep.
- c. ——— He's at confession
- d. ——— *He's in trouble.
- e. ——— *He's all in dither.

Bolinger 1971:249 の説明によれば、where-question において a-c の応答は文法的であるのに対し、d-e は metaphorical な用法であるから非文法的だという。とすれば、ing-form は literal location と abstract location の間のどこかに位置し得るカテゴリーとなろうか。

15 There-be 構文と共起する a-ing は Mossé 1938, Visser 1973 に相当の用例がある。また Kuya 1976a 参照。

16 これが、現代英語に限られた現象でないことは明らかである。例えば、エリザベス朝劇に表われる ing 形と場所副詞の共起についても同じ法則が働いているように思われる。詳しくは Kuya 1976b 参照。

17 この essence/accident の対立はすぐ後の 10, 11 で言及する Quirk et al. 1972:859 の

permanent/temporary, Anderson 1973:52 の absolute (or equative)/contingent (or transient) の対立に相当する。また Emonds 1976:107f によれば Milsark は形容詞を characterizing/state-descriptive という意味論上の対立によって考察していると言
うが、同様の趣旨と思われる。

18 安井稔他 1976:106ff などを参照。

19 形容詞に格表示をすることは、一見奇妙に聞こえるかもしれぬが、形容詞を NP と見做す立場の学者も相当いることは考慮しておく必要がある。例えば Ross 1969 参照。

20 Comrie 1976:98ff も同様な表現が各国語にみられると述べ、類例を提示している。

参 考 文 献

Allan, K. (1971) 'A note on the source of *there* in existential sentences,' FL 8.1-18.

_____ (1972) 'In reply to 'There₁, there₂,' FL 8.119-124.

Anderson, J.M. (1971) The grammar of case; towards a localistic theory. Cambridge Univ. Press.

_____ (1973) An essay concerning aspect. Mouton.

Ando, S. (1976) A descriptive syntax of Christopher Marlowe's language. Univ. of Tokyo Press.

Bach, E. (1967) 'Have and be in English syntax,' Language 43 462-485.

Bolinger, D. (1967) 'Adjectives in English: attribution and predication,' Lingua 18. 1-34.

_____ (1971) 'The nominal in the progressive,' LI 2.246-250.

_____ (1972) Degree words. Mouton.

_____ (1973) 'Essence and accident: English analogs of Hispanic *ser-estar*,' in Kachru et al (1973).

_____ (1975) Aspects of language, 2nd ed. Harcourt.

Chafe, W.L. (1970) Meaning and the structure of language. Univ. of Chicago Press.

Chomsky, M. (1975) Reflections on language. Pantheon.

Comrie, B. (1976) Aspect. Cambridge Univ. Press.

- Curme, G.O.(1922) A grammar of the German language. Ungar.
- _____(1931) Syntax. Heath.
- Di Pietro, R.J.(1971) Language structures in contrast. Newbury House.
- Emonds, J.E.(1976) A transformational approach to English syntax. Academic Press.
- Fillmore, Ch.J.(1968) 'The case for case,' Universals in linguistic theory (ed. by Bach & Harms). 1-88.
- _____(1969) 'Toward a modern theory of case,' Modern studies in English (ed. by Reibel & Schane). 361-375.
- Grady, M. (1967) 'On the essential nominalizing function of English -ING,' Linguistics 34.5-11.
- Green, G.(1973) 'A syntactic syncretism in English and French,' in Kachru et al.(1973).
- Halliday, M.A.K.(1967) 'Notes on transitivity and theme in English;Part 2,' JL 3.199-244.
- _____(1968) 'Notes on transitivity and theme in English; Part 3,' JL 4.179-215.
- _____(1973) Explorations in the functions of language. Arnold.
- Huddleston, R.(1971) The sentence in written English. Cambridge.
- _____(1976) An introduction to English transformational syntax. Longman.
- Ikegami, Y.(1976) "Syntactic structure and the underlying semantic patterns-- a 'localistic' hypothesis,' Linguistics 170.31-44.
- Jespersen, O.(1924) The philosophy of grammar. Allen & Unwin.
- _____(1937) Analytic syntax. Allen & Unwin.
- Kachru, B.B. et al.(1973) Issues in linguistics. Univ. of Illinois Press.
- Kirkwood, H.W.(1969) 'Aspects of word order and its communicative function in English and German,' JL 5.85-107.
- Kuno, S.(1971) 'The position of locatives in existential sentences,' LI 2,333-378.

- Kuya, T.(1976a) 'The progressive and certain related structures in Tudor plays,' Phoenix 12.105-132.
- _____(1976b) The ing-form as the locative--from diachronic and synchronic viewpoints. unpublished.
- Langacker, R.W.(1974) 'Movement rules in functional perspective,' Language 50.630-664.
- Lehmann, W.P.(1973) Historical linguistics. 2nd ed. Holt.
- Liefcrink, F.(1973) Semantico-syntax. Longman.
- Lyons, J.(1967) 'A note on possessive, existential and locative sentences,' FL 3.390-396.
- _____(1968) Introduction to theoretical linguistics.Cambridge Univ. Press.
- Miller, G.A. & Johnson-Laird, Ph.N.(1976) Language and perception, Belknap/Harvard.
- Mossé, F.(1938) Histoire de la forme périphrastique être + participe présent en germanique 2. Klincksieck.
- Muir, J.(1972) A modern approach to English grammar. Batsford.
- Namiki, T.(1973) 'English existential sentences with definite subjects,' Studies in English linguistics 2.126-135.
- Perlmutter, D.M.(1970) 'The two verbs begin,' Readings in English transformational grammar (ed. by Jacobs & Rosenbaum). 107-119.
- Quirk, R. et al.(1972) A grammar of contemporary English. Longman.
- Ross, J.R.(1969a) 'Auxiliaries as main verbs,' Studies in philosophical linguistics 1 (ed. by Todd). 77-102.
- _____(1969b) 'Adjectives as noun phrases,' Modern studies in English (ed. by Reibel & Schane). 352-360.
- _____(1973) 'A fake NP squish,' New ways of analyzing variation in English (ed. by Bailey & Shuy). 96-140.
- Sag, I.A.(1973) 'On the state of progress on progressives and statives,' New ways of analyzing variation in English (ed. by Bailey & Shuy). 83-95.
- Sampson, G.(1972) 'There₁, there₂,' JL 8.111-117.

- Stockwell, R.P. et al.(1973) The major syntactic structures of English. Holt.
- Visser, F.Th.(1973) An historical syntax of the English language III-2. Leiden.
- 井上和子(1975) 「進行相・完了相の場所的解釈」『英文学研究』第12巻。pp.87-105.
- 石川清文(1972) 「On the syntax of expletive THERE」『島根大学文理学部紀要』文学科編第5号。pp.39-64.
- 三上 章(1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版。
- 毛利可信(1972) 『意味論から見た英文法』 大修館。
- 中島文雄(1961) 『英文法の体系』 研究社。
- 中島邦男(1967) 『英語学論究』 南雲堂。
- 高橋太郎(1976) 「すがたともくろみ」 金田一春彦(編) 『日本語動詞のアスペクト』 麦書房。
pp.117-153.
- 安井稔他(1976) 『形容詞』 (現代の英文法 第7巻。) 研究社。
- 吉川美夫(1970) 「There-construction」 論説資料保存会(編) 『英語学論説資料』
第2巻第3分冊 pp.374-387.